

今日の所は、紀元41年から44年まで王の位に就いていたヘロデ・アグリッパ一世がゼベダイの子で「ヨハネの兄弟ヤコブを剣で殺し」て、それがユダヤ教徒の関心を買ったことに気を良くして、続いて使徒ペトロも捕えた。ちょうど過越と除酵のお祭りが来たので、それが終わった後にユダヤの民衆の前に引き出して処刑しようとしていた、そういう話の途中である。

## 6節 a

## 「ヘロデがペトロを引き出そうとしていた日の前夜」

過越と除酵の祭りの間は聖なる日だからというので処刑を遠慮していたわけだが、でもユダヤ全国から巡礼者が集まっているその「民衆の前に引き出すつもりであった」わけだから、祭りが終わったらすぐ実行しようとしていたに違いない。だから、その「前日」というのは、恐らく除酵祭の最後の日、お祭りがいよいよ終わるという時だったであろう。

## 6節 b

**「ペトロは二本の鎖でつながれ、二人の兵士の間で眠っていた。番兵たちは戸口で牢を見張っていた。」**

これは前回学んだ4節で「四人一組の兵士四組に……監視させた」ということの詳しい内訳であろう。昼夜6時間交代で「四組」が「監視」をする。そして、その「四人一組」のうちの「二人」がそれぞれ「鎖で」ペトロの右手と左手に自分の体を結びつける、そして「二人」が牢の外で番をするという「四人一組」だったと思われる。

その中で、左右の手をつながれたまま、でも、ペトロは「眠っていた」という。

## 7節 a

## 「すると、主の天使がそばに立ち、光が牢の中を照らした。」

「天使」が現れて「栄光」の「光」を伴うというのは、クリスマスの夜も同じであった(ルカ2:9)。

## 7節 b

**「天使はペトロのわき腹をつついて起こし、『急いで起き上がりなさい』と言った。すると、鎖が彼の手から外れ落ちた。」**

獄中から天使の導きで救い出されたというのは、5章19節にもあった。今回は大変ユーモラスにも「わき腹をつついて起こし」た。

## 8-10 節

「天使が、『帯を締め、履物を履きなさい』と言ったので、ペトロはそのとおりにした。また天使は、『上着を着て、ついて来なさい』と言った。それで、ペトロは外に出てついて行ったが、天使のしていることが現実のこととは思われなかった。幻を見ていたのだと思った。第一、第二の衛兵所を過ぎ、町に通じる鉄の門の所まで来ると、門がひとりでに開いたので、そこを出て、ある通りを進んで行くと、急に天使は離れ去った。」

普通「上着」を着てから「帯を締める」のだと思われる、「帯を締め」て「履物を履いて」から「上着を着なさい」というのは、少し不思議な感じがする。「帯を締め、靴を履き」という言葉は、主の過越のときことを思い出させる(出 12 章 11 節「それを食べるときは、腰帯を締め、靴を履き、杖を手にし、急いで食べる。これが主の過越である。」)

## 11 節

「ペトロは我に返って言った。『今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださいましたのだ。』」

「我に返る」と訳されているのは、「自分自身の中に成る」という表現。この「成る」という言葉は 9 節で「天使のしていることが現実のこととは思われなかった」と訳されている文章、直訳すると「天使によって成されていることが真実であるとは思われなかった」という言葉と同じ言葉。それで「幻……だと思って」いたのだが、今度は「自分自身の中に成った」、それで「初めて本当のことが分かった」という。

話しは以上であるが、既述のように、ペトロという人は使徒言行録 5 章 17 節以下の一連の物語の中で主の天使によって脱獄したことがある人物である。その時の出来事と今回の出来事の違いを比較することによって、今回の出来事の記述を通して伝えようとしていることを確認してみたい。

いくつかの違いを挙げると、

5 章では、投獄されてまた脱獄したのは「使徒たち」皆である。しかし今回は、ペトロ一人だけ。

また 5 章では、投獄したのはユダヤ教最高法院であるサンヘドリンであったが、今回は、ヘロデ・アグリッパ一世という国家権力。それもつい先ほど 12 使徒の一人ゼベダイの子ヨハネの兄弟ヤコブを実際に剣で殺した王である。

更に 5 章との違いは、脱獄をした後の違いにも出てくる。5 章では、使徒たちが皆牢屋から抜け出しているということが分かった時、番人たちは別に罰せられたわけではないし、番をさせたユダヤ教最高法院自身もただ「思い感った」とだけ言われている (24 節)。今回は、ペトロが脱獄したことが分かると、番兵は、19 節になるが「死刑」に処

せられる。囚人に代わって番兵自身が刑を受けるという結末になっている。

この違いはもう一つ、脱獄した後の居場所が分かっているかという点。5章の方では、牢屋にはいないが、“神殿の境内で命の言葉を語っている”という通報が入ったので、サンヘドリンはその「使徒たちを」、今度は「手荒なことをしない」で連れ戻した（26節）。だから番兵は処罰されずに済んだ。ところが今回は、ペトロは「他の所へ行っ」てしまって、ヘロデたちは、18節以下「大騒ぎになった。……捜しても見つからない」ので、それで「番兵たちを……調べて」処刑したという。

つまり、5章の脱獄事件では、天使が言っている通り「この命の言葉を残らず民衆に告げなさい」（20節）という積極的な目的があって牢屋から連れ出したが、今回は、そうではなく、純粹にペトロを死から「救い出す」、そのことのためである。そこで、ペトロは牢屋から他の所へ隠れてしまう。つまり、今回の事件の中心点は、最後の11節にある。

**「今、初めて本当のことが分かった。主が天使を遣わして、ヘロデの手から、またユダヤ民衆のあらゆるもくろみから、わたしを救い出してくださったのだ。」**

では何故主はペトロを救い出したのか。

この「救い」は、非常に丁寧に12章3節、4節に「過越祭」「除酵祭」の時である、こう繰り返されている。その時に「主が……救い出してくださった」と言うと、モーセとイスラエルが主によってエジプトから救い出されたという出来事を想起せずにはおられない。

今日のところで「救い出してくださった」と訳されている言葉（ἐξαιρέω、エッグサイレオー）は、新約聖書では数回程度しか出てこない非常に珍しい表現であるが、「取り上げる」「持ち上げる」という言葉の頭に、「～から」とか「～の外へ」という接頭辞（ἐξ、エッグス）がついた言葉である。新約聖書では珍しいが、旧約聖書のギリシア語訳では、この「外へ持ち上げる、取り上げる」という言葉を、ヤハウエ（主なる神）によるエジプトからの救いに頻繁に使っていた（出エジプト記3：8節、18：4、8－10節等）。

ヤハウエがイスラエルをエジプトから救い出されたのは、ヤハウエの選びの民を形成し建国させるためであった。

そのヤハウエの救出の御手が、今度はペトロにも差し伸べられたのだ、とペトロは「今、初めて本当のことが分かった」のである。言わば、「ヘロデ・アグリッパ」はかつてのファラオであり、「ユダヤ民衆のあらゆるもくろみ」というのはかつてのエジプトのようである。そして「わたし」ペトロは新しきイスラエルを造る者として「救い出された」のだと「今、……分かった」のである。

もう一つこの救出劇の意義を考えるヒントは、この「**主が救い出してくださった**」この「**わたし**」ペトロという人物は、普通の人物とは違う。少なくとも二つ主イエスから重要な預言と約束を聞いた人だということ。

その一つは、ヨハネによる福音書 21 章で、ティベリアス湖半で復活のキリストから殉教の死を予告されたことである。

**「はっきり言っておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。」**(18-19 節 a)。

ペトロが、先まで「**両手を伸ばして**」「**鎖につながれ**」ていたのは、まさにこの主イエスの預言が刻々と実現しつつあるという場面である。恐らくペトロは、この預言の実現が間近であるということに覚悟していたのではないだろうか。

もう一つは、マタイによる福音書 16 章 18-19 節である。

**「わたしも言っておく。あなたはペトロ。わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない。わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる。」**

つまり、ペトロの上に「**天の国の鍵**」を行使するようなキリストの「**教会**」が建て上げられていかななくてはならないのである。

ちょうどモーセとイスラエルの人々がヤハウエによってファラオとエジプトの民から救い出されたのは、神の選民イスラエルの形成と建国を目指していたように、ペトロがヘロデとユダヤ民族の企てから救い出されたのも、新しきイスラエルとしてのキリスト教会(ガラテヤ 6:16)を形成し確立を目指す、そういう救出劇であったと言えよう。